日本台湾学会設立 20 周年記念シンポジウム 「『新たな世代』の台湾研究」

日本の台湾文学研究この 10 年（2008-2017）

赤松　美和子

はじめに
第 1 節　日本台湾学会における台湾文学研究成果
第 2 節　台湾の台湾文学研究
第 3 節　翻訳と復刻
第 4 節　台湾文学に関する博士論文
おわりに

（要約）
本稿では、日本における最近 10 年（2008-2017 年）の台湾文学に関する研究成果を、前 10 年（1998-2007 年）と比較したうえで概観した。日本台湾学会における最近 10 年の台湾文学の研究成果を研究対象時代別に統計した結果、前 10 年では過半を占めていた日本統治期の文学を対象とした研究は減少傾向にあり、1945 年以降、とりわけ 1987 年以降の文学を対象とした研究が増加傾向にある。さらに、翻訳や復刻出版の近況、これまでの台湾文学に関する博士論文、および日本台湾学会以外の台湾文学研究発表媒体などについても紹介した。

はじめに

本稿の目的は、日本における近 10 年（2008-2017 年）の台湾文学に関する研究成果を、前 10 年（1998-2007 年）と比較したうえで、概観し検討することにある。

まず、近 10 年（2008-2017）の研究成果の基盤となる日本における台湾文学研究の足跡を、河原功、星名宏修、下村作次郎の研究に基づき簡単に整理する[1]。戦後台湾文学研究および台湾研究の源流は 1970 年 5 月に戴國煇がアジア経済研究所で河原功、若林正丈、松永正義、宇野利玄とともに始めた研究会に始まる[2]。その後、同研究会は 1971 年頃に東寧会、1975 年には後藤新平研究会へと発展し、1978 年には台湾近現代史研究会を発足、機関誌『台湾近現代史研究』を創刊した[3]。同誌には河原功による楊逵研究を始め、池田敏雄、張文環、龍瑛宗といった日本統治期に活躍した作家・研究者の回想記など文学研究成果も掲載された[4]。関西では咿唖の会の中島利郎、下村作次郎、今里禎、三船清らが 1981 年に台湾文学研究会（代表：塚本輝和）を発足し、機関誌『台湾文学研究会報』を刊行、同研究会のメンバーが中心となって、1991 年に天理台湾研究会を結成し、95 年に天理台湾学会と名称を改め、現在に至る[5]。東京では、藤井省三、河原功、垂水千恵、山口守、池上貞子、野間信幸らが 1997 年に東京台湾文学研究会を立ち上げた[6]。翌 1998 年には日本台湾学会設立大会が開かれ、現在に至る。

星名宏修は、2008 年、日本台湾学会設立 10 周年記念シンポジウム「台湾文学研究この 10 年、これからの 10 年」において、日本および台湾における台湾文学研究の足跡について概観し、「私が個人的に自戒しているのは、植民地時代の台湾文学を研究対象とする「日本人」－自らが望んだわけではないにせよ、「帝国の末裔」のひとりである－ として、そのポジションには意識的で

ありたいということだ」[7] と述べられた。では、その後 10 年の日本における台湾文学研究は、それぞれのポジションからどのような貢献をしてきたのか、以下にその一部を概観する。

第 1 節　日本台湾学会における台湾文学研究成果

1. 研究対象時代別統計

春山明哲は、「日本台湾学会の 10 年を振り返って」『日本台湾学会報』第 11 号（2009 年）において、前 10 年（1998-2007）の『日本台湾学会報』および『学術大会報告者論文集』に掲載された論文および報告を、その主題に基き以下の四つの時代に区分し整理した [8]。

① 1895 年以前（清朝以前）
② 1895-1945 年（日本統治期）
③ 1945-1986 年
④ 1987 年 - 現在

近 10 年（2008-2017）における日本台湾学会における文学に関する研究成果は、『日本台湾学会報』掲載論文が 20 本、学術大会における報告が 68 本であった。これは前 10 年（1998-2007）において、『日本台湾学会報』掲載論文 18 本、学術大会報告 47 本と比較しても、大いに健闘したといえる。ただ直近 5 年（2013-2017）は減少傾向にある。

さらに春山の類別に基づき、日本台湾学会 20 年の文学研究成果を 5 年ごとに、研究対象とされるテクストが発表された時間を基準として、時代別（1895 年以前・1895-1945・1945-1986・1987 年以降）に四区分し 、統計したところ、以下の図 1 のような結果が得られた。

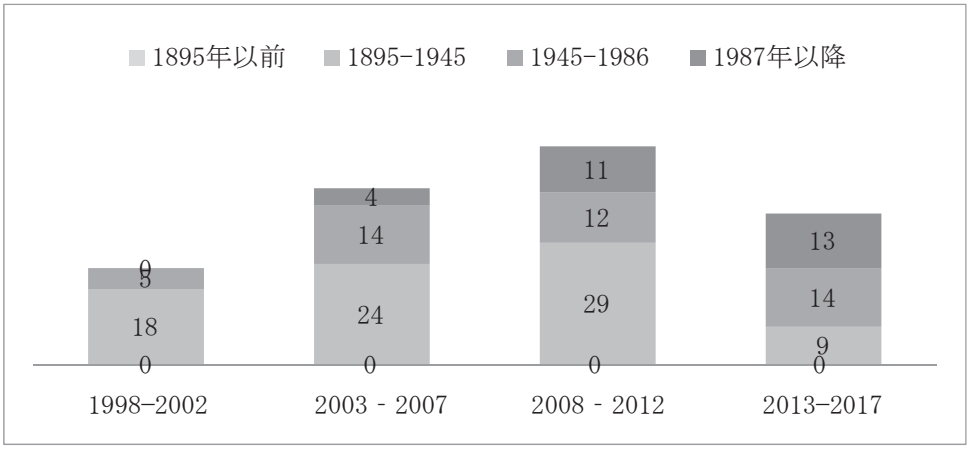

図 1　文学研究 研究対象時代別統計

1998-2002 の文学に関する論文および報告数は 23 本、うち、1895 年以前は 0 本、日本統治期である 1895-1945 は 18 本、1945-1986 は 5 本、1987 年以降は 0 本。2003-2007 の文学に関する論文および報告数は 42 本、うち、1895 年以前は 0 本、1895-1945 は 24 本、1945-1986 は 14 本、1987 以降は 4 本。2008-2012 の文学研究成果は 52 本、うち、1895 年以前は 0 本、1895-1945 は 29 本、1945-1986 は 12 本、1987 年以降は 11 本。2013-2017 の文学の研究成果は 36 本、1895 年以前は 0 本、1895-1945 は 9 本、1945-1986 は 14 本、1987 年以降 13 本である。

時代別研究対象の多様化は顕著である。直近 5 年（2013-2017）の研究対象は、1895 年以前を対象とした研究はないものの、三つの時代に比較的均等に分かれており、バランスがよいというべきかもしれない。一方、前 10 年（1998-2007）において 1895-1945 の日本統治期の文学を対象とする研究が文学研究全体の 65％を占めていたのに対し、近 10 年（2008-2017）では 43％まで減少し、さらに直近 5 年では 25％まで落ち込んでいる。

2. 研究対象時代別論文目録と研究傾向

以下、『日本台湾学会報』掲載論文および学術大会での報告論文を先述の四つの時代に区分し、傾向を簡単に分析した上で、目録を掲載する。

（1）1895 年以前：0 本

（2）1895-1945 年：38 本

1895-1945 年を研究対象とした研究成果は、前 10 年（1998-2007）が 42 本であったのに対し近 10 年（2008-2017）は 38 本と微減した。研究対象とされた作家は、王白淵、龍瑛宗、翁鬧、巫永福、黄得時、浜田隼雄、坂口䙥子、森鴎外、久留島武彦、真杉静枝などである。前 10 年（1998-2007）の『日本台湾学会報』所収された文学に関する研究論文 7 本すべての論文タイトルに作家名（楊逵、呂赫若、佐藤春夫、張文環、周金波、真杉静枝、中村地平、島田謹二、楊雲萍ら）が記されていた。学術大会報告については、6 割の報告論文タイトルに作家名が入っており、前 10 年の研究の中心は作家研究にあったといえる。

近 10 年（2008-2017）の『日本台湾学会報』、学術論文報告論文 38 本中、タイトルに作家名が入った論文は、13 本、34％を占めるに止まった。代わりに、『台湾民報』、『フォロモサ』、『台湾愛国婦人』、『台湾民間文学集』、『台大文学』、風詩社など、新聞、雑誌、文学団体などが研究対象とされ、作家研究、テクスト研究に加え、文壇研究、文学場研究、文学賞研究、漢詩研究、中国新文学の影響研究、俳誌、ツーリズム、比較文学研究、比較文化研究、植民地都市研究、雑誌研究、民間文学、日本語文学、原住民表象、児童文学研究など文学史を様々な角度から再検討するような研究、あるいは表象研究などテクストを越境する広い範囲を対象とした研究が増加した傾向にある。

1895-1945 年を研究対象とした『日本台湾学会報』掲載論文および学術大会での報告論文目録は以下の通りである。

2008	和泉司	「懸賞当選作としての「パパイヤのある街」―『改造』懸賞創作と植民地〈文壇〉」
2008	唐顥芸	「王白淵の東京留学について」
2008	黄毓婷	「翁鬧を読み直す―「戇爺さん」の語りの実験をめぐって」
2008	許時嘉	「植民地台湾の漢詩活動と内地日本の漢詩ブームとの接点について」
2008	劉海燕	「台湾新文学における中国新文学の影響―『台湾民報』（1923～32）における中国新文学作品の分析を中心として」
2009	謝惠貞	「台湾人作家巫永福における日本新感覚派の受容―横光利一「頭ならびに腹」と巫永福「首と体」の比較を中心に―」
2009	沈美雪	「『相思樹』小考―台湾最初の俳誌をめぐって―」
2009	柳書琴	「植民地都市、文芸生成、ローカル知識：1930年代の台北とハルピン」
2009	張文薫	「アカデミーの文化参入―台北帝国大学と40年代台湾文壇・文学の成立」
2009	楊智景	「戦時下日本人作家の植民地旅行と台湾表象の生成」
2009	和泉司	「文学懸賞を目指す植民地の〈作家〉志望者―日本帝国の〈文壇〉を巡って」
2009	謝惠貞	「『フォルモサ』同人から出発した巫永福の異質性 ―横光利一経由の意識の流れの受容をめぐって」
2009	嶋田聡	「黄得時試論―植民地期台湾における『地方文化』概念の確立に至る道」
2009	下岡友加	「雑誌『台湾愛国婦人』の基本的性格」
2010	謝惠貞	「巫永福「眠い春杏」と横光利一「時間」―新感覚派模写から「意識」の発見へ―」
2010	豊田周子	「日本統治期台湾知識人の民衆理解―『台湾民間文学集』故事編を例として」
2010	王姿雯	「「心象風景」の再構成―梶井基次郎の影響をめぐって」
2010	呂淳鈺	「可愛的仇人―台湾における大東亜ディスクールと恋愛小説(1937-1945)」
2011	豊田周子	「『台湾民間文学集』故事篇にみる1930年代台湾新知識人の文化創造」
2011	游勝冠	「風車詩社唯美文学路線の政治的意味」
2011	橋本恭子	「「台湾の美」をめぐる認識の変化―『台湾』の議論を出発点として」
2011	許倍榕	「「文化遺産の再認識」について―「民間文学整理論争」をめぐって―」
2011	鳳気至純平	「書いたのは誰の歴史か？―浜田隼雄の台湾歴史小説研究―」
2011	岡田英樹	「「満洲国」における中国人作家の言語表現――日本語利用の問題をめぐって」
2011	下岡友加	(県立広島大学)「黄霊芝の日本語小説「輿論」考」
2011	Matthew Mewhinney	「ディスプレースメントとリフラクション：周金波の作品にみるモダニティ」
2012	鳳気至純平	「書いたのは誰の歴史か？―『南方移民村』から見る濱田隼雄の歴史意識―」
2012	張文薫	「帝国アカデミーの「知」と1940年代台湾文学の成立―『台大文学』と「東洋学」を中心に―」
2012	唐顥芸	「王白淵『棘の道』における思想上の受容について－『人間文化の出発』との 比較を中心に」

2013	王敬翔	「戦争期の台湾における中国古典小説の和訳、改作の「競演」をめぐって」
2013	許雅筑	「日治時期在台女性日人作家的殖民地空間書寫―以 1930 年代婦人文化演講會之女性作家群為 分析對象」
2014	王姿雯	「30 年代の日本文壇における「左翼植民地」の内実―『文学評論』誌上の「新聞配達夫」と「牛車」評を中心に」
2015	小笠原淳	「坂口樗子の台湾蕃地小説とその系譜―戦中と戦後を通して―」
2015	許時嘉	「明治期日本漢詩人の海外活動と漢詩文創作―籾山衣洲を例にして」
2015	中島利郎	「日本統治期の台湾の児童文学」
2015	河原功	「戦前期「日本内地」における台湾児童文学」
2016	張家禎	「統治前期の領台戦争と台湾漢民族像－森鴎外、久留島武彦を中心に」
2016	簡中昊	「戦時下の文学における台湾原住民像―真杉静枝の『原住民もの』を例に―」

(3) 1945-1986 年：26 本

1945-1986年を対象とした研究成果は、19本から26本へと1.4倍に増加した。前10年（1998-2007）においては、戦後直後の文学やその状況および現代詩が主たる研究対象であった。個別の作家としては、呉濁流、朱天心が取り挙げられていた。一方、近 10 年（2008-2017）では、黄春明、邱永漢、日影丈吉、朱天心、西川満、李喬、呉濁流、黄靈芝、林懐民、王井泉、王詩琅、白先勇など多くの作家が研究対象とされた。文芸政策、反共文学、モダニズム、郷土文学、文壇、文学場、文学雑誌、文学賞、引揚、日本の作家（安部公房）やアメリカの作家（フォークナー）の影響、通俗出版などテーマは多岐に及ぶ。台湾における台湾文学研究の影響や、執筆者や報告者の多くが、台湾民主化以降、ポストコロニアル全盛期以降に研究を始めた世代であることを多分に反映した研究成果であるといえよう。

1945-1986 年を研究対象とした『日本台湾学会報』掲載論文および学術大会での報告論文目録は以下の通りである。

2008	高橋一聡	「1950 年代国民党の『共匪』認識と反共文芸作戦」
2008	西端彩	「モダニズム vs 郷土文学？―黄春明のモダニズム実践を通 して―」
2009	陳培豐	「作られた台湾の『伝統』民謡―音声テキストから見た二度の郷土文学運動」
2009	赤松美和子	「戒厳令期における『作家』を志望する青年たち―二大新聞の文学賞を中心に」
2009	許菁娟	「1980 年代初期における台湾郷土文学の発展 ―黄春明の作品の映画化現象からの考察」
2009	倉本知明	「国『本』合作としての戦後台湾 ―邱永漢『長すぎた戦争』における老兵表象を中心に」
2010	松永正義	「戦後台湾における日本語と日本イメージ」
2010	高嘉励	「日影丈吉の推理小説に見られる植民地台湾の異文化交流」
2010	陳国偉	「国境を越えた知の翻訳：戦後台湾の推理小説における探偵の「身体」の形成」
2010	川原絵梨奈	「外省人作家の文学観とその変遷―雑誌『三三集刊』（1977-81 年）の朱天心 を素材として」

2011	和泉司	「〈引揚者〉にとっての植民地―西川満・引揚後の台湾表象を中心に―」
2011	明田川聡士	「「虚構」の想像と創造―李喬《寒夜三部作》におけるフォークナー作品の影響を中心に―」
2013	李郁蕙	「呉濁流の文学言語を考える―日本語と漢文との共存」
2013	下岡友加	「呉濁流と黄霊芝、創作方法の比較考察」
2014	明田川聡士	「李喬「小説」と1960年代台湾文学界における安部公房の受容―台湾文学における1960年代実存主義運動から80年代民主化運動への展開―」
2014	明田川聡士	「70年代李喬作品における「抗日」表象―「羅福星」と「結義西来庵」を中心に」
2014	和泉司	「邱永漢の「日本人論」分析―高度成長期日本と国府統治下台湾の狭間で」
2014	三須祐介	「「読む」ことの快楽、「書く」ことの政治学―林懐民「逝者」をめぐって」
2015	明田川聡士	「李喬『結義西来庵』における「抗日」表象の重層性―1970年代官製文学の中での抵抗と台湾意識の再編成―」
2015	張文菁	「50年代台湾言情小説と通俗出版の専業化」
2016	張文菁	「1950年代台湾の通俗出版をめぐる文芸政策と専業化」
2017	白井魁	「『台湾文芸』第9期王井泉特集における歴史回想に対する一考察」
2017	張文菁	「1950年代『聯合報』『大華晩報』『民族晩報』の副刊にみる連載小説」
2017	明田川聡士	「「文友通訊」と戦後第一代作家：1950年代台湾文壇における“跨世代”作家たちの模索」
2017	白井魁	「呉濁流主宰『台湾文芸』第一回台湾文学賞選評から見る台湾文学再建の問題――王詩琅を中心に」
2017	八木はるな	「白先勇小説における女性表象をめぐる言説の変容」

(4) 1987年以降　24本

戒厳令解除後民主化に伴い、「台湾文学」が台湾の文学として認識され始めた1987年以降を研究対象とした論文は、前10年（1998-2007）が4本であったのに対し、近10年（2008-2017）は6倍の24本へと激増した。当代文学を盛んに研究対象とする台湾における台湾文学研究の影響を多分に受けていると推察できる。さらに、かつて日本の文学研究では、存命作家を研究対象にしてはならないという暗黙のルールがあったが、台湾文学の場合、存命作家を研究対象外とすると研究対象が限られることや、近年は日本でも当代文学研究が盛んとなった背景があるのかもしれない。近10年、文学分野における同時代研究は充実したものになっている。

前10年（1998-2007）において研究対象とされてきた朱天心、白先勇への興味は引継ぎつつも、原住民作家のシャマン・ラポガンやパタイ、郷土文学の作家である鄭清文、外省人第二世代の蘇偉貞、新郷土文学の担い手である甘耀明、セクシュアル・マイノリティを牽引してきた阮慶岳、マレーシア出身の楊邦尼、日本語文学の新たな可能性を拓いた温又柔など、様々な来歴を持つ作家が研究対象とされた。

高校国文教科書、LGBT文学、新移民文学、日本語文学、映像など新たな研究対象に加えて、作家やテクストのみならず文学場、日本表象、翻案比較研究などテクストを超えた視点からの研究も増加傾向にあり、研究対象、研究方法ともに多様化している。

1987 年以降を研究対象とした『日本台湾学会報』掲載論文および学術大会での報告論文目録は以下の通りである。

2008	李文茹	「集団的記憶の連続と断絶－戦後の霧社事件の関連作品をめぐって」
2008	呉佩珍	「なぜ、今、女性作家は三〇年代を書くのか？―日台女性作家による殖民地台湾の記憶の再編制」
2008	松崎寛子	「台湾高校国文教科書における台湾文学」
2008	倉本知明	「身体的記憶から都市の廃墟へ―朱天心『ハンガリー水』における眷村表象を中心に―」
2009	邱貴芬	「可視化 / 不可視化される原住民族女性：シャマン・ラポガンの創作にみるジェンダー・ポリティクス」
2009	詹閔旭	「白先勇の各時期のおける『中国翻訳』の策略」
2009	倉本知明	「身体的記憶が喚起する廃墟の記憶―朱天心『ハンガリー水』における眷村表象を中心に―」
2010	松崎寛子	「台湾の高校「国文」教科書における台湾文学―鄭清文「我要再回来唱歌」を中心に―」
2011	倉本知明	「愛情のユートピアから情欲と狂気のディストピアへ―「解厳」前後における蘇偉貞の眷村表象―」
2012	赤松美和子	「「海角七号」「雨衣」にみるジェンダーおよび日本「再」表象のポリティクス―「悲情城市」「多桑」は如何に「引用」されたか」
2012	西端彩	「甘耀明小説における国家的歴史記憶と日本「再」表象―「殺鬼」を中 心に」
2013	赤松美和子	「台湾ポストニューシネマの日本表象―『悲情城市』(1989 年) から『海角七号』（2008 年）へ―」
2014	八木はるな	「白先勇小説の映画への改編をめぐって―エグザイルとしての在米中国人―」
2014	松崎寛子	「戦後日本映画『愛を乞うひと』及び『トロッコ』における台湾表象―台湾映画『珈琲時光』及び『海角七号』における日本表象との比較から」
2014	三木直大	「記憶と原罪―阮慶岳「広島の恋」をめぐって」
2015	倉本知明	「現代台湾における中国語俳句―新俳句運動期における台湾詩人たちの創作活動を中心に」
2015	八木はるな	「白先勇「孽子」の改編とその受容―映画、テレビドラマ、舞台劇をめぐって」
2016	三木直大	「1990 年代台湾文化再編成における雑誌『島嶼邊縁』の位置」
2016	洪凌	「雑誌『島嶼邊縁』が目指したもの ―ジェンダー・マイノリティ・ネイションをめぐって」
2017	劉靈均	「楊邦尼「毒薬」の「当事者性」論争について：「同志文学」と「馬華文学」の交差点」
2017	橋本恭子	「胡淑雯『太陽の血は黒い』日本語訳刊行の意義：読みと語りの可能性を中心に」
2017	倉本知明	「移民工文学賞という試み―包摂と排除の狭間で―」
2017	魚住悦子	「19 世紀末の瑯嶠（恒春半島）を作家たちはどう書いたか―原住民作家パタイの『暗礁』『浪涛』を中心に―」
2017	謝恵貞	「日本語への質問状――在日台湾人作家温又柔の文学実践を中心に」

3.「日本の」台湾文学研究

以上のように、四つの時代に分類し、研究成果を概観してきた。拙稿は、「日本の台湾文学研究」を分析対象としているが、日本の台湾文学研究の「日本の」とは、「日本において」あるいは「日本人の」という二重の意味がある。拙稿では「日本において」という意味で使っているが、「日本人の」という意味についても意識的に考察すると、たとえば、『日本台湾学会報』掲載論文 20 本、学術大会における報告論文 68 本、合計 88 本の研究成果のうち、台湾人研究者の研究成果は、38 本となり全体の約 43％を占めている。研究対象を日本統治期（1895-1945）に限定すると、研究成果 38 本のうち、23 本が台湾人研究者の研究成果であり、約 61％に上る。このように台湾人研究者が「日本の」台湾文学研究、とくに日本統治期の台湾文学研究を長年にわたって牽引している。

4. 研究対象の時代と物語のなかの時間軸の越境

図 1 において、研究成果 88 本を研究対象とされた作品の発表年をもとに区分し、日本統治期の作品を研究対象とした研究論文が減少している傾向を指摘した。だが、1945 年以降に、あるいは 1987 年以降に発表された作品でありながらも、語られた物語のなかの時間軸に注目すると、1945 年以前を舞台とする作品を研究対象とした論文もある。

たとえば、図 1 で研究対象の発表年により 1945-1986 に区分した研究成果のうち、明田川聡士「李喬『結義西来庵』における「抗日」表象の重層性―1970 年代官製文学の中での抵抗と台湾意識の再編成―」（2015）は、70 年代に発表された作品を研究対象としているが、作品に描かれた西来庵事件は 1915 年に起こっているため、物語の時間軸に基づくと、1895-1945 年に区分できる。

同様に、研究対象テクストの発表年により 1987 以降と区分した研究成果のうち、呉佩珍「なぜ、今、女性作家は三〇年代を書くのか？―日台女性作家による殖民地台湾の記憶の再編制」（2008）は、津島祐子が 1930 年に起こった霧社事件を題材とした小説『あまりに野蛮な』（2008）を対象とした発表であるため、発表年に基づくと 1987 年以降に分類できるが、作中の時間軸に従うと 1895-1945 に区分することになる。

また、魚住悦子「19 世紀末の瑯嶠（恒春半島）を作家たちはどう書いたか―原住民作家パタイの『暗礁』『浪涛』を中心に―」（2017）の研究対象である小説『暗礁』は 2015 年に刊行されたものの、1871 年の牡丹社事件についても語られており、作中の時間軸に基づくと、1895 年以前に区分するのがふさわしい。このように発表年ではなく作中の時間軸を基準とすると、直近五年（2013-2017）の文学の研究成果 36 本のうち、1895 年以前は 1 本、日本統治期 13 本、1945-1986 は 11 本、1987 年以降 11 本となり、図 2 のように日本時代を舞台とする作品を対象として分析した論文が最も多くなる。

魏德聖監督の映画『海角七号』（2008）の大ヒットをメルクマールとして、霧社事件を活劇化した魏德聖監督『セデック・バレ』（2011）、嘉義農林学校野球部の甲子園での活躍を青春ドラマ化した馬志翔監督『KANO』（2014）、現代の大学生が日本時代にタイムトラベルする葉天倫監督『大稲埕』（2014）などにもみられるように、日本時代は現代台湾エンターテイメント映画の素材

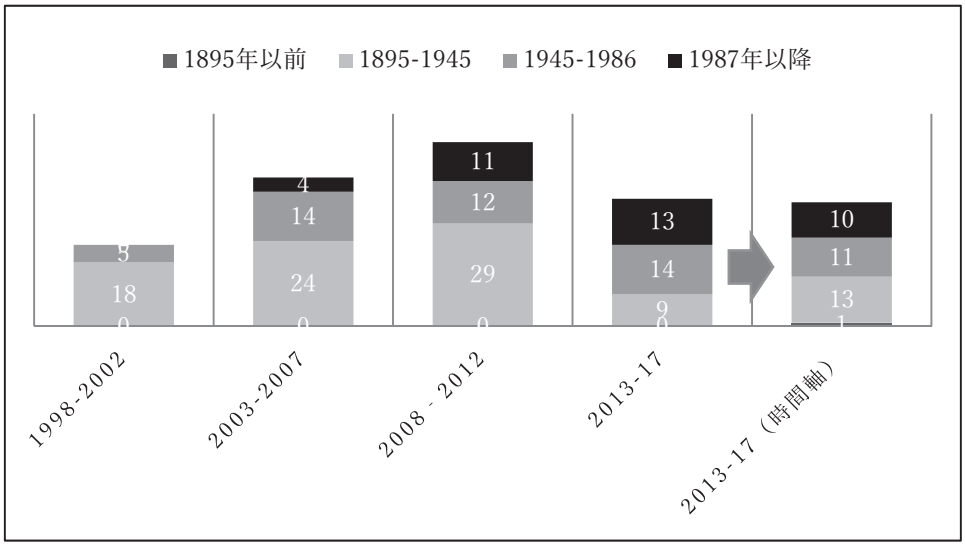

図 2　直近 5 年を作品の中の時間軸で区分

の一つとなった。文学においても、日本軍に入隊した怪力の少年を主人公とする甘耀明『鬼殺し（上・下）』（2009）や、日本時代にタイムトラベルする台日百合小説の楊双子『花開時節』（2017）など、日本時代は創作テーマの一つとなり、被植民地経験のない世代が創作した日本時代の作品は増加傾向にある。

文学は、作中ではいずれの時代を語ることも可能だ。日本の台湾文学研究は大きく分けて、日本文学科、中国文学科、比較文学科出身者が担ってきた。前 10 年（1998-2007）の研究では、出身学科に拘らず日本統治期の文学を研究対象とするか、あるいは日本文学出身者は戦前の日本統治期の日本語文学、中国文学出身者は戦後の中国語文学をそれぞれ研究対象とする傾向があったように思われる。だが、当然のことながら戦前と戦後は繋がっており、昨今はそれらを越境する作品が多く現れてきた影響もあり、研究も戦前戦後を跨ぐ傾向がより見受けられるようになった。

10 年前、星名宏修は「私が個人的に自戒しているのは、植民地時代の台湾文学を研究対象とする「日本人」－自らが望んだわけではないにせよ、「帝国の末裔」のひとりである－ として、そのポジションには意識的でありたいということだ」と述べた。先述したように、昨今、日本統治期に発表された作品を対象とする研究は減少傾向にある。だが、現代台湾において絶えず日本統治期に関する物語や言説が再生産される限り、今後も日本の台湾文学研究は限りなくそのポジションに意識的にならざるを得ない。

第 2 節　台湾の台湾文学研究

1. 台湾文学系 / 所創設 20 年

本節では、台湾の台湾文学研究にも目を向けてみたい。星名宏修によると、1994 年に国立清

華大学で開催された「頼和及其同時代的作家―日本拠時期台湾文学国際学術会議」をメルクマールとして、台湾文学をテーマとした数多くの学術会議が台湾で開かれるようになったという[9]。1997 年には真理大学の前身である淡水学院に台湾初の台湾文学系が設置され、2000 年には成功大学に台湾文学研究所（修士）、2002 年には博士課程が創設された。2007 年秋の時点で、台湾各地の大学で台湾文学・言語・文化・歴史などを専攻する学部と大学院は、全部で 23、うち、文学・言語に関するもの（台湾文学研究所など）は 17 開設されている[10]。2003 年には国家台湾文学館（現、国立台湾文学館）が台南に開館した。星名は、「台湾（文学）研究は、いまや台湾において「顕学」となり、多くの研究機関に潤沢な資金や人材が投下される国家的なプロジェクトとなった」[11] と記している。

それでは、近 10 年（2008-2017）の台湾の台湾文学研究を覗いてみよう。教育部統計處「專校院學科標準分類（第 4 版）查詢」[12] をもとに筆者が算出したところ、図 3 のように、台湾文学系、台湾文学研究所は、1997 年に台湾初の台湾文学系が設置されて以来、2016 年までの 20 年間に、学士の学位を 2728 名、修士の学位を 1168 名、博士の学位を 48 名にそれぞれ授与している。

図 3 をみると、学部生は、2010 年まで上昇し続け頭打ちとなっている。また修士卒業者は、2012 年がピークでありその後なだらかに減少する傾向がみられる。前 10 年（1998-2007）は、台湾文学が「顕学」となる上昇基調にあったが、近 10 年（2008-2017）、とりわけ直近 5 年（2013-2017）は下降傾向にあるようだ。実際に、中山医学大学台文系は 2016 年に最後の卒業生を送り出し、学生募集を停止している[13]。ちなみに、教育部の区分により、台湾文学系や研究所など台湾文学関係の教育研究機関が属する「台湾語文学類」に属する学科を有する大学数は 2016 年現在 16 機関だが、「中国語文学類」に属する研究機関は 50 機関ある。「中国語文学類」は、たとえば 2016 年には、学士 3030 名、修士 599 名、博士 113 名（うち、華文系／所[14] は、学士 475 名、修士 31 名、博士 0 名）を送り出している[15]。つまり、中文が一年間に送り出す卒業生数は、台文が創設以来 20 年間に送り出した総卒業生数とほぼ同数である。ただ修士課程については、台文の方が学部から修士へと進学する比率が高い。

図 3　台湾文学系 / 所卒業生数

2. 台湾文学学会創設

こうしたなか、台湾文学研究機関創設 20 年目の 2016 年に、台湾文学研究界の新たな地平を拓く一歩として、台湾文学学会（台内團字第 1050084964 號）が創設された[16]。会員数は約 300 名とのことである[17]。台湾文学学会は、国立清華大学台湾文学研究所が 2012 年に創設した「台湾文学研究会」に端を発し、台湾文学の研究、教学、創作、翻訳および国際交流の推進を目的とした学術団体である。初代理事長は林淇瀁（国立台北教育大学台文所）、副理事長は黄美娥（国立台湾大学台文所）、常任理事は李癸雲（国立清華大学台文所）、常任幹事は柳書琴（国立清華大学台文所）、その他、国立台湾師範大学、国立中正大学、国立聯合大学、国立静宜大学、真理大学など国立政治大学を除く各大学の台文所に所属する研究者が理事に名を連ねている。実務は、秘書長の張俐璇（国立台湾大学台文所）が行っている。

台湾文学学会は、創設以降、台湾各地でシンポジウムや座談会などイベントを企画し、時にネットでライブ中継を配信しているほか、2017 年より学術大会も毎年開催している。

2017 年の夏、台湾文学学会は、突然注目を集めた。それは、高校国文科の課綱（学習指導要領）における文言文の割合を巡り、現行の課綱（文言文の割合は 45-65％）の文言文の割合を 30％に下げるとする教育部課程審議会大会の提案に対して、台湾文学学会が記者会見を開き、大幅改訂への支持を表明、現行の文言文の割合は高過ぎると主張したことが、広く報道されたからだ。台湾文学学会は、現代文の割合が増えれば台湾文学が教材として採用される可能性が増えると考えたのだ。それに対し、王德威を始めとする中文関係者らは、課綱改訂に慎重な姿勢を求め、文言文の割合削減への懸念を示した。結局、文言文の割合は 35-45％に決着した。

台湾文学学会の記者会見は、高校国文教育において、依然として中文系 / 所卒業生たちが主流派であり続ける現状に一石を投じ、台湾文学学会として、台湾文学が台湾の国文教育において重視されることを求めると同時に、台湾文学系 / 所卒業生たちの未来の進路を拓いていこうとする意思表明でもあったと思われる。昨今、台湾では、中文系、台文系に加え、華文系を備えた大学もある。台湾の大学における中文、台文、華文の棲み分け、それぞれの存在意義への問題提起が、文言文と白話文の論争（文白論争）が起こった背景にはあるのではないか[18]。

第 3 節　翻訳と復刻

1. 翻訳

日本で台湾文学を研究するということは、「帝国の末裔」というポジションからのみならず、外国文学としての台湾文学に向き合う行為でもある。日本における台湾文学研究者の大いなる貢献として、翻訳出版を通しての日本への台湾文学の紹介がある。

戦後日本における台湾文学の出版について翻訳を中心に概観する。1945-1997 年には約 61 冊が日本で出版（一部、原文が日本語のものも含む）、前 10 年（1998-2007）には約 101 冊の翻訳本が刊行され、続く近 10 年（2008-2017）にも 93 冊が翻訳出版されている[19]。つまり、1998 年以降、一年間に約 10 冊の台湾文学が日本語の読者に届けられている計算になる。

翻訳に至る経緯は様々であろうが、台湾からの助成金を受けてシリーズ化を通して翻訳出版に至った例も多い。主なシリーズを以下に紹介する。

前 10 年（1998-2007）に刊行された大型のシリーズとしては、下村作次郎、孫大川、土田滋、ワリス・ノカン編集による「台湾原住民文学選」が挙がる。文化建設委員会の援助を得て草風社より、2003 年から 2007 年まで、全 9 巻（10 巻刊行の予定だが、第 10 冊目は未刊行）が刊行されている。

前 10 年（1998-2007）から近 10 年（2008-2017）にかけて出版されたシリーズ、黄英哲、藤井省三、山口守編集による「新しい台湾の文学」は、1999 年から 2008 年の間に、文化建設委員会の援助を得て国書刊行会より全 12 巻が出版されている（蛇足だが、筆者が最初に読んだ台湾文学はこのシリーズの第一巻目だった）。

「台湾現代詩人シリーズ」は、2006 年以降、シリーズものでは最多の 16 巻が刊行されている。第Ⅰ期は林水福と三木直大、第Ⅱ期と第Ⅲ期は三木直大の編集により、文化建設委員会と台湾文学館台湾文学翻訳出版補助の援助を受けて思潮社より出版されている。なお、2018 年秋刊行の台湾現代詩人シリーズより、文化部翻訳出版補助に依るとのことである[20]。

黄英哲・白水紀子・垂水千恵編集による「台湾セクシュアル・マイノリティ文学」は 2008 年から 2009 年にかけて 4 巻が作品社より刊行された。文化建設委員会の援助による。

「台湾熱帯文学」は、黄英哲、高嘉謙、松浦恒雄、荒井茂夫編集により、2010 年から 2011 年にかけて 4 巻が、文化建設委員会の援助により、人文書院より刊行された。

2013 年から始まった出版社・あるむの「台湾文学セレクション」は、黄英哲、西村正男、星名宏修、松浦恒雄の編集により、国立台湾文学館および文化部の出版補助を受けて現在のところ全 4 巻が刊行されている。

「台湾郷土文学選集」は、澤井律之、中島利郎の編集により国立台湾文学館台湾文学翻訳出版補助を得て研文出版より 2014 年に全 5 巻が刊行された。

なお、台湾文学関係の出版助成は、1990 年より行政院文化建設委員会（現・文化部）に依ってきたが、2010 年より国立台湾文学館がその役割を担い、「台湾文学翻訳出版補助計画」が始まった。2012 年 6 月には台湾文学館内に「台湾文学外訳センター」（Taiwan Literary Translation Center: TLTC）も開設されている [21]。2015 年より文化部がその役割を担い、現在に至る[22]。このように出版助成は、文化建設委員会から台湾文学館に引き継がれ、現在は文化部の管轄となっている。

近 10 年（2008-2017）において出版された台湾文学作品の翻訳者延べ 131 名中、日本台湾学会員数（2014 年の学会員名簿参照）は 87 名であった。日本における台湾文学作品翻訳の約 66％を日本台湾学会員が担っていることになる。

なお、こうした翻訳成果は、第 1 節で確認した研究成果にも大いに反映されていることを付言しておく。

2. 復刻

翻訳は日本語の読者のためだが、台湾文学に興味関心を持つあらゆる読者や研究者のために、日本統治期の文学テクストや資料も多く復刻されてきた。

たとえば、前 10 年（1998-2007）には、河原功、中島利郎編集による『日本統治期台湾文学日本人作家作品集』全 5 巻（緑蔭書房 , 1998）、河原功、黄英哲、下村作次郎、中島利郎編集による『日本統治期台湾文学台湾人作家作品集』全 6 巻（緑蔭書房、1992-1998）、河原功編集の『日本植民地文学精選集 台湾編』第一期全 8 巻（ゆまに書房､2000）､『日本植民地文学精選集 台湾編』（ゆまに書房、2001）第二期全 6 巻、河原功編集による『風月．風月報．南方．南方詩集』No.1-190 全 10 巻（南天書局、2001）、河原功、黄英哲、黄美娥、下村作次郎、中島利郎、星名宏修の編集による『日本統治期台湾文学集成』第一期全 20 巻（緑蔭書房、2002-2003）および『日本統治期台湾文学集成』第二期全 10 巻（緑蔭書房、2007）などが復刻され、日本統治期の文学研究に大きく貢献した。

近 10 年（2008-2017）においても、河原功編集により『全国引揚者新聞 ; 台湾協会報 ; 日台通信 』（不二出版、2011）、『台湾同盟会報 ; 台湾同盟通信』（不二出版、2011）、『台湾同盟通信』（不二出版、2011）、『愛光新聞』（不二出版、2011）、『台湾協会報』（不二出版、2012）、『台湾引揚史』（不二出版、2012）、『琉球官兵顛末記』（不二出版、2012）、『資料集 終戦直後の台湾』（不二出版、2015）や、中島利郎編集による『周金波日本語作品集 第 2 集』（緑蔭書房、2013 年）、中島利郎、横路啓子編集の『台湾日日新報』近代文学関係作品目録 昭和編（1926-1944）』（緑蔭書房、2014）なども刊行された。

第 4 節　台湾文学に関する博士論文

1. 台湾文学に関する博士論文一覧

本節では、日本における台湾文学に関する博士論文について、取得年、学位取得者、論文タイトル、および学位を授与した研究機関を、取得年に基づき（1）1997 年以前、（2）1998 年から 2007 年、および（3）2008 年から 2017 年に三分し、以下に整理する[23]。

（1）1997 年以前：4 本

1993	劉孝春	「台湾文学現実主義的道路」名古屋大学
1996	黄英哲	「戦後初期台湾における文化再構築に関する研究：台湾省行政長官公署時期（1945 年 -1947 年）を中心として」立命館大学
1996	游珮芸	「台湾における日本植民地時代の児童文化の研究」お茶の水女子大学
1997	黄振原	「日本知識人と旧植民地台湾：文芸活動とその周辺」立命館大学

（2）前 10 年（1998 年 -2007 年）：19 本

2000	張季琳	「台湾プロレタリア文学の誕生：楊逵と「大日本帝国」」東京大学

2000	李郁惠	「台湾の日本語文学研究 : 脱周縁化の軌跡」広島大学
2001	謝建明	「台湾近代文学で読む日本植民地政策 : 頼和、楊逵、張文環の文学からみた台湾文学の一特徴」立命館大学
2001	垂水千恵	「呂赫若研究 : 1943 年までの分析を中心として」お茶の水女子大学
2002	岡崎郁子	「戦後台湾の日本語文芸研究 : 黄霊芝を中心として」岡山大学
2004	下村作次郎	「台湾近代文学の諸相 : 1920 年から 1949 年」関西大学
2004	簡月真	「台湾に残存する日本語の実態」大阪大学
2005	王惠珍	「龍瑛宗研究 : 台湾人日本語作家の軌跡」関西大学
2005	阮文雅	「中村地平研究 :「南方文学」の理想と現実」広島大学
2005	張文薫	「植民地プロレタリア青年の文芸再生 : 張文環を中心とした『フオルモサ』世代の台湾文学」東京大学
2005	李文茹	「帝国女性と植民地支配 : 1930 ～ 1945 年における日本人女性作家の台湾表象」名古屋大学
2006	上村ゆう美	「台湾の戦前と戦後を繋いだ文学活動 : 楊逵と銀鈴会を中心に」お茶の水女子大学
2006	丸川哲史	「台湾における二 . 二八事件前／後の文学空間－－ 脱植民地期化と祖国化の交錯する磁場」一橋大学
2006	劉淑如	「「台湾の少女」の誕生 : 日本統治期の台湾人作家黄氏鳳姿に関する研究」北海道大学
2007	石井周	「台湾古典詩における台湾表現 : 割譲前後の仙境表現を中心に」新潟大学
2007	王暁芸	「「主体的他者」と「客体的他者」との対話 :「皇民化期文学」に語られた自己異化のメカニズム」広島大学
2007	許菁娟	「統戦工作下の文学現象－－ 1970 年代後半の台湾現代文学の研究」一橋大学
2007	沈美雪	「俳句の地域性と国際化 : 台湾俳壇を中心に」弘前大学
2007	莫素微	「周金波研究 : 植民地医師作家の文学」関西大学

(3) 近 10 年（2008-2017）: 27 本

2008	赤松美和子	「戦後台湾における文学場形成と戒厳令解除後の文学」お茶の水女子大学
2008	和泉司	「重層する帝国の〈文壇〉: 日本統治期台湾の日本語文学をめぐって」慶應義塾大学
2008	呉亦昕	「帝国の中心で〈台湾文学〉をつくる : 日本語文芸誌『フオルモサ』(一九三三～三四年）とその周辺」筑波大学
2008	張桂娥	「台湾における現代日本児童文学作品の翻訳受容の研究 : 異文化間における物語受容の可能性とひずみ」東京学芸大学
2008	唐顥芸	「日本統治期台湾文学における近現代詩の創成と展開」神戸大学
2008	豊田周子	「日本統治期台湾新文学にみる台湾知識人の精神史」大阪市立大学
2008	羽生美保子	「佐藤春夫「大逆事件」「台湾」関係作品研究 : あらかじめ失われた友愛」名古屋大学
2008	楊智景	「日本領有期の台湾表象考察 : 近代日本における植民地表象」お茶の水女子大学
2008	頼衍宏	「日本語時代の台湾短歌 : 結社を中心にした資料研究」東京大学
2009	泉文生	「戦前台湾における公学校教育の研究 :「国語」教育という名の「日本語教育」の体系」国学院大学
2010	歐薇蘋	「楊逵研究 : 植民地時代における楊逵の「転向」を中心に」熊本大学

2010	許時嘉	「明治日本の文明言説と植民地統治：台湾統治をめぐって」名古屋大学
2010	橋本恭子	「『華麗島文学志』とその時代：比較文学者島田謹二の台湾体験」一橋大学
2011	王姿雯	「日本統治期日台文学交流史の研究：佐藤春夫・葉山嘉樹から張文環・翁鬧まで」東京大学
2011	倉本知明	「歴史の関節のはずし方：「解厳」前後における眷村出身作家たちの叙述戦略」立命館大学
2012	小笠原淳	「台湾現代小説における「モダニズム」の展開：白先勇のエクリチュールの変遷をめぐって」神戸大学
2012	謝惠貞	「日本統治期台湾文化人による新感覚派の受容：横光利一と楊逵・巫永福・翁鬧・劉吶鷗」東京大学
2012	李宛儒	「日本統治下における台湾近代劇の生成と発展：植民地知識人の演劇活動の系譜を中心に」名古屋大学
2013	黄毓婷	「植民地作家翁鬧再考：1930 年代の光と影」東京大学
2013	松崎寛子	「鄭清文とその時代：“本省人”エリート作家と戦後台湾アイデンティティの形成」東京大学
2013	劉海燕	「台湾新文学運動の初期的展開：1920 年代植民地知識人青年の近代探索」名古屋大学
2015	染川清美	「台湾日本語俳句に関する文化史的考察―「台北俳句会」を中心として―」大阪大学
2015	呂美親	「日本統治下における台湾エスペラント運動研究」一橋大学
2016	明田川聡士	「李喬文学と“台湾意識”の形成 ――フォークナー、安部公房の受容と“歴史素材小説”創作をめぐって」東京大学
2016	天神裕子	「“半山”作家林海音の主婦像―台湾と北京・日本を漂泊した家庭」お茶の水女子大学
2017	黄英哲	「漂泊與越境：兩岸文化人的移動」関西大学
2017	八木はるな	「白先勇小説翻案作品論――変奏する現代台湾文学――」東京大学

2. 台湾文学に関する博士論文の傾向

台湾文学に関係する博士論文数は、1997 年以前が 4 本、前 10 年（1998-2007）が 19 本、近 10 年（2008-2017）が 27 本であり、合計 50 本となる。第 2 節で記したように台湾の研究機関が授与した博士号の合計は 49 であり、現状では台湾を上回る数の台湾文学に関する博士号が日本で授与されていることになる。図 4 は、1993-2017 年の博士論文数である。

1993-2017 年の 24 年間に 50 本、つまり、一年に約 2 本の台湾文学に関する博士論文が提出されている計算になる。2008 年に向けて徐々に増加し、2008 年のみ 9 本と群を抜いて多いのは、日本台湾学会創立 10 年を迎え、日本における台湾文学研究の基盤が整ったことの証左だろうか、それとも「ポスドク一万人計画」の影響だろうか。

前 10 年（1997-2007）の博士論文の多くが日本統治期や戦後初期の文学、あるいは日本語や日本文学の影響を研究対象としているのに対し、近 10 年（2008-2017）はこうした傾向を引き継ぎつつも、戦後に中国語で発表された文学を研究対象とした博士論文が少しずつ増えた傾向にある。

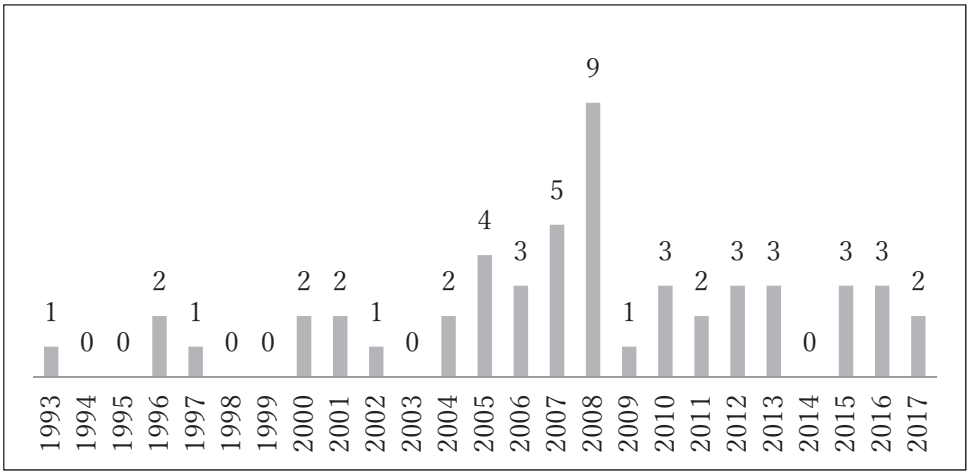

図 4　1993-2017 博士論文数

おわりに

1. 日本台湾学会以外の台湾文学研究

池上貞子、河原功、下村作次郎、中島利郎、藤井省三、松永正義、三木直大（五十音順）ら日本における台湾文学研究を切り拓き主導してきた研究者がここ数年間で多く退職した。引き続き研究者としてさらに精力的に活躍中であり、日本の台湾文学研究を今も牽引し続けているものの、寂しくて不安でたまらない。

この現実から少しでも未来に進むために、日本台湾文学学会以外の台湾文学研究についてもみていきたいと思う。台湾文学研究の発表の場は日本台湾学会に限らない。天理台湾学会の長年の貢献は今更いうまでもない。日本台湾学会においては日本統治期を対象とした研究は減少傾向だが、天理台湾学会では日本統治期を研究対象とした研究成果が積み重ねられている。

中文関係では、日本中国学会や日本現代中国学会、中国文芸研究会（野草）、また、日文関係では、日本近代文学会、昭和文学会、日本文学会、東アジアと同時代日本語文学フォーラムなどの場も、台湾文学の研究成果発表の場として機能している。

たとえば、近 10 年（2008-2017）中文関係では、『日本中国学会報』（日本中国学会）には 2 本、『現代中国』（現代中国学会報）に 1 本、『野草』（中国文芸研究会）には 18 本も台湾文学関係の論文が掲載されている。『野草』は、2004 年に続き、2012 年にも台湾文学の特集号が刊行された。さらに、合宿などでも台湾の研究者との交流が盛んに企画されている。

日文関係は、『日本近代文学』および日本近代文学会関連の雑誌に 6 本（いずれも 2013 年以降）、『昭和文学研究』にも 4 本が掲載されている。ちなみに昭和文学会は 2017 年 12 月に「台湾日本語文学会」と姉妹学会を締結した[24]。

また、2013 年に創立した「東アジアと同時代日本語文学フォーラム」（韓国・中国・台湾・日本・

香港の日本研究者が集まり、それぞれの国における日本近代文学体験の特殊性及び歴史性を互いに比較しながら研究の地平を拡げ、日本近代文学を東アジアの観点から再構築する企画[25]）が母体となり、高麗大学日本研究センターが中心となって 2014 年に創刊した『跨境 : 日本語文学研究』には 13 本の台湾関係論文が掲載され、うち、10 本が日本時代を分析対象にしている。

このように日本台湾学会以外の台湾文学研究の一部（紀要などは未確認）を俯瞰しただけでも、日本における台湾文学研究は、中文、日文ともに衰退しているわけではなく、媒体が多様化した結果であると解釈できる。また、日本の中文研究、日文研究の新たな地平を拓くためにも、台湾文学研究は、看過できない存在へと位置づけられていったと思われる。こうした日文・中文研究により日本における台湾文学研究がますます豊饒なものとなっていくことを期待してやまない。

2. 台湾文学研究これからの 10 年に向けて

日本台湾学会創立後に台湾文学研究を始め、台湾が民主化した後、ポストコロニアル研究全盛期に大学院生時代を送った筆者は、「帝国の末裔」としての気概もほとんどなく、先人たちのようないわば王道をいくような研究もできない。外国文学としての台湾文学に向き合い、自分の言葉の軽さに辟易としながらガラパゴス化した研究を日本や台湾で細々と発表したりすることが精一杯である。

私たちの世代はどのように台湾文学に、台湾文学研究に向き合っていけばよいのか。途方に暮れるなかで、今回、台湾文学研究の近 10 年を振り返り、日本台湾学会の着実な研究成果、翻訳や復刻の貢献、毎年少しずつではあるが確実に積み重ねられている博士論文による研究成果、また、台湾文学と関係する学会において研究発表が増加傾向にあることに大いに励まされた。

今後 10 年の日本台湾学会における台湾文学研究の役割は、日本、台湾および東アジアの関係学会の研究成果にも目配りしつつ、互いに連携するなど日本における台湾文学研究のハブ的存在を担うことではないだろうか。

（注）

1 河原功『台湾渡航記――霧社事件調査から台湾文学研究へ ――』村里社、2016 年・星名宏修「台湾文学研究、この 10 年、これからの 10 年」『日本台湾学会報』第 11 号、2009 年・下村作次郎「台湾研究、この 10 年、これからの 10 年――関西地域における台湾研究――」『日本台湾学会報』第 11 号、2009 年・下村作次郎「日本における台湾文学研究」『天理大学学報』第 169 号、1992 年・下村作次郎「戦後日本における台湾文学関係研究文献目録」中島利郎ほか編『日本統治期台湾文学研究文献目録』、緑蔭書房、2000 年に詳しい。

2 河原功、前掲書、291 頁。

3 同上、291-294 頁。

4 同上、293-294 頁。

5 同上、295-296 頁。

6 同上、297 頁。

7「台湾文学研究、この 10 年、これからの 10 年」『日本台湾学会報』第 11 号、2009 年、72 頁。

8 時代区分にあたって、春山明哲「日本台湾学会の 10 年を振り返って」『日本台湾学会報』第 11 号、2009 年 7-8 頁を参照した。

9 星名宏修「台湾文学研究、この 10 年、これからの 10 年」前掲論文、69 頁。

10 同上論文、70 頁。

11 同上論文、72 頁。
12 教育部統計處「專校院學科標準分類（第 4 版）查詢」https://stats.moe.gov.tw/bcode/default.aspx （2018 年 4 月 28 日アクセス）。
13「台文系倒閉 象徵本土化的黃粱一夢？」https://udn.com/news/story/6928/1745176 （2018 年 4 月 28 日アクセス）。
14「華文系」については、山口守「台湾における台湾文学教育」『日本台湾学会ニュースレター』第 26 号、2014 年に詳しい。
15 教育部統計處「專校院學科標準分類（第 4 版）查詢」前掲を利用して、筆者が算出した。
16 台湾文学学会 http://www.atl.org.tw/ （2018 年 4 月 28 日アクセス）。
17 同上。
18 拙論「多元化台湾現地リポート（1）台湾文学の二つの挑戦―新移民文学と文白論争について」『東方』441 号、2017 年に詳しい。
19 日本における台湾文学翻訳出版目録は、拙著『台湾文学と文学キャンプ』東方書店、2012 年、『臺灣文學與文藝營』群學出版社、2018 年、および陳芳明著／下村作次郎ほか訳『台湾新文学史　下』東方書店、2015 年の巻末に掲載している。
20 三木直大会員談。
21 国立台湾文学館ＨＰ http://en.nmtl.gov.tw/index.php?option=com_content&view=category&layout=blog&id=52&Itemid=110&limitstart=12（2018 年 4 月 28 日アクセス）。
22 文化部 HP「文化部首辦「翻譯出版補助」為臺灣作家行銷國際 創造臺灣海外授權契機」https://www.moc.gov.tw/information_250_37746.html （2019 年 3 月 25 日アクセス）。
23「Cinii 日本の博士論文をさがす」https://ci.nii.ac.jp/d/、「【博士論文】学術データーベース」 http://hakase.site/、「東京大学学位論文データーベース」 http://gakui.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/（いずれも 2018 年 5 月 1 日アクセス）を参照した。なおデーターベースにより、年表記と年度表記の場合があるため一年の誤差が生じている可能性がある。
24 昭和文学会 HP http://swbg.org/wp/（2018 年 4 月 28 日アクセス）。
25「東アジアと同時代日本語文学　設立趣意書」https://eacjlforumweb.wixsite.com/eastasiaforum（2018 年 4 月 28 日アクセス）。

［付記］

本稿の中国語版は蘇碩斌編『2017 年台灣文學年鑑』国立台湾文学館、2018 年 12 月に掲載されています。